OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	「闘病記」資料群の性格と愛媛大学図書館医学部分館における事例
Author(s)	土出, 郁子
Citation	大学図書館問題研究会誌. 2008, 31, p. 7-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2873
rights	(c) 2008 大学図書館問題研究会
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大学図書館問題研究会誌　第31号　2008年　8月　抜刷
大学図書館問題研究会

「闘病記」資料群の性格と愛媛大学図書館医学部分館における事例

Tobyo-ki : Their characteristics and the building of a collection at the Medical Library of Ehime University

土　出　郁　子

「闘病記」資料群の性格と愛媛大学図書館医学部分館における事例

Tobyo-ki : Their characteristics and the building of a collection at the Medical Library of Ehime University

土 出 郁 子*

抄　録

「闘病記」という語が一般に用いられるようになった。この資料群は、民間の研究団体が患者のための情報源として注目し、従来は文学等の分類にあったものを疾患名によって分類、再配置したものである。

「闘病記」の記述は病いの当事者としての語りであり、病いを負うものにとっては同じ立場から発信された情報源、体験の共有の契機となる。同時に、医療者にとっても患者側の文脈において病いを捉える手がかりとなる。医学教育において臨床が重視される中で、「闘病記」は多くの患者側の経験を擬似的に体験することのできる資料となろうが、カリキュラムの中で取り扱うことは難しい。愛媛大学では、医学生による「闘病記」データ整備の活動がきっかけとなって「闘病記文庫」の設置を行った。全体的にはよく利用され、看護学科では演習の補助資料として活用されているが、医学科における活用や運用方針は今後も検討の余地がある。

目　次

はじめに
1.「闘病記」資料群について
　1.1「闘病記」とは
　1.2「健康情報棚プロジェクト」の試み
　1.3 医学・看護教育における活用の意義
2. 愛媛大学の事例
　2.1「闘病記文庫」設置の経緯
　2.2 活用の実態と課題
3. 結論：現状と今後の課題
おわりに

○ はじめに ○

「闘病記」という語が、一般によく用いられるようになった。従来は文学等として扱われていた「闘病記」の記述は、病（やま）い[1]や医療の経験者が語る有用な情報源とみなされつつあり、図書館においても資料分類等に影響を及ぼしている[2]。

「闘病記」は主に患者、すなわち医療の受け手側によって活用されているが、愛媛大学図書館医学部分館では、医学生の「闘病記」へのかかわりがきっかけとなって「闘病記文庫」を設置するという経験を得た。

本稿ではまず、「闘病記」と呼ばれる資料群について述べ、資料群の形成と普及に大きく関与している民間の研究団体「健康情報棚プロジェクト」とその活動を紹介する。その後に「闘病記」の医学・看護教育における意義を考察する。事例では、愛媛大学図書館医学部分館に「闘病記文庫」が設置された経緯と活用の状況を記す。あわせて、これらの資料群形成と、大学図書館での活用における課題をも検討する。

＊つちで いくこ　大阪大学附属図書館　平成20年6月3日受理

○ 1.「闘病記」資料群について ○

1.1「闘病記」とは[3]

「闘病記」という語自体は以前から使われてはいたようであるが、その記述が研究対象となり、存在が広く認識されるようになってきたのは最近10年ほどであると考えられる。国語辞典等では「闘病」は定義されているものの、「闘病記」は掲載されていない。「闘病記」は「病気と闘っている（向き合っている）プロセスが書かれた手記」と定義され[4]、古くは正岡子規『病牀六尺』等に見られるように、文学作品として存在した。1970年代後半からは「闘病記」が一般の人によって書かれ、出版され始めた。現在では出版だけでなく、Web上に公開されている例も多い。

「闘病記」の書き手は患者本人、家族、介護者といった「病いを負っている人」であり、「闘病記」には病いと向き合いながら営まれる日々の生活や、医療の受け手としての経験が語られる。この語りは当事者の主体的なものであり、「主観的」「内容に科学的根拠が伴わない」等の理由から、医療の場にかかわるテキストとして用いられることは稀である。その一方、主に看護学や教育学分野において、病いの当事者が生活や医療の場でどのような状況におかれ、どのように感じているのかを知る手がかりとして「闘病記」の記述を取り上げる研究も行われている。

「闘病記」は、資料分類の一としては確立されず、一般には文学、手記、ルポルタージュ、絵画、書き手の職業等に分類されてきた。記述内容が主観的であるため、自然科学よりも文学的価値のもとに置かれてきたと考えられる。資料群の特性に、自費出版の割合が比較的高く容易に入手され得ないこと、題名からは当該資料が「闘病記」であるかどうかが判別しがたいこと等が挙げられる。このように未分類であった「闘病記」を、固有の分類に取り上げようとする試みがある。民間研究団体「健康情報棚プロジェクト」の活動で、病いや医療の経験を患者の立場から伝える資料として「闘病記」をとらえ、資料に疾患分類を与えて一般に提供しようというものである。

1.2「健康情報棚プロジェクト」の試み

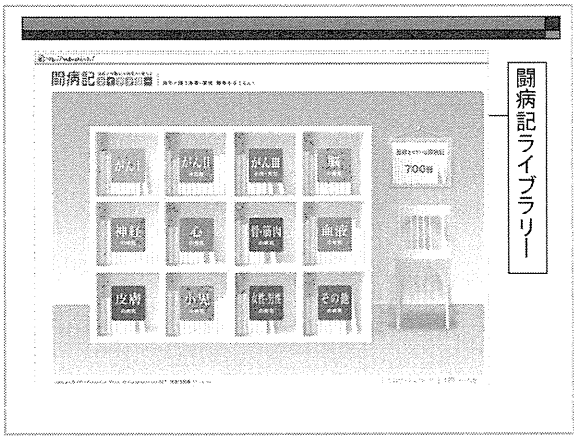
「健康情報棚プロジェクト」（以下、「棚プロジェクト」）は、「だれもが自分自身でからだや病気について学習できる健康・医療情報のステーションを作るためのプロジェクト」[5]で、2004年8月に発足した。東京医科歯科大学附属図書館の石井保志氏を代表とし、図書館職員、看護学研究者、看護師、出版社関係者等、約30名が参加している。発足のきっかけは東京大学医療政策人材養成講座[6]である。

代表の石井氏は、医療に関する情報を主な利用者の属性によって大まかに分類し、一般向けの健康・医療情報（健康雑誌、家庭用の医学書等）と医療従事者向けの医学情報（学術雑誌文献、医学専門書等）を挙げている。その上で、両者の間に位置するような、実際の医療の場で患者と医療従事者とが共有しうる情報および情報源の不足を主張し、その不足（「棚プロジェクト」では「隙間」と呼んでいる）を埋める情報源として「闘病記」、「患者会資料」を取り上げた[7]。「闘病記」や「患者会資料」は患者自身の体験に基づいて発信された情報であるが、前述の通り、医療に関する情報という観点からの収集や体系的な整理は行われてきていない。「棚プロジェクト」はこれらの資料を医療に関する情報の中で体系的に位置づけ、活動の第一段階として「闘病記」の収集、整理を行った。方法は以下の通りである：既に刊行されている実際の「闘病記」を古書店等で探し、入手する。資料を1冊ずつ読み込み、書誌事項や疾患名などの項目を抽出し、200字程度の抄録と合わせて図書データを作成する。分類は抽出された疾患名に基づいて行い（表1）[8]、図書本体には疾患名の1段ラベルを貼付し、カバー、帯を外さずにビニールブックカバーをかけて装備する[9]。

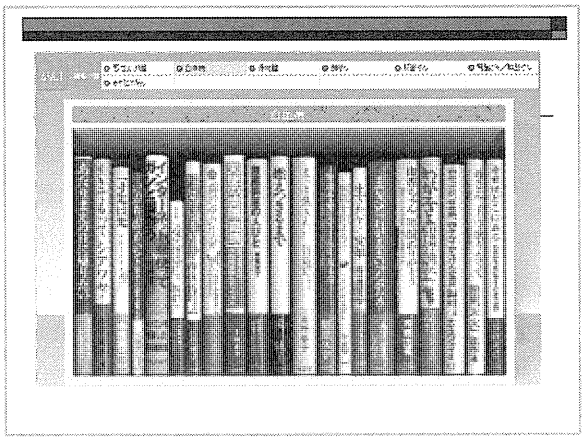
大分類	小分類
が　ん	がん1：乳がん
小児がん	がん2：乳がん・卵巣がん
疾　病	がん3：乳がん・胃がん
脳	：
：	
（計7分類）	（計334分類）

（表１）

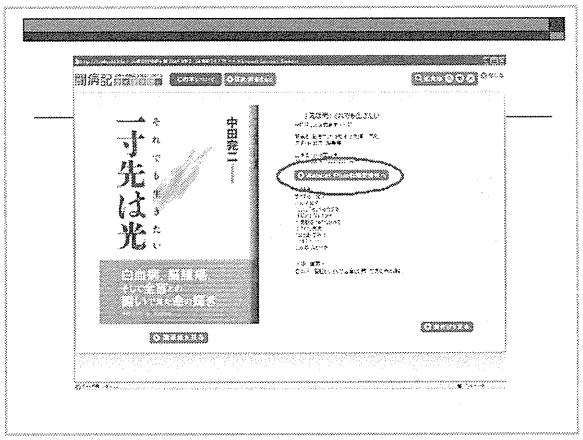
整理され装備された図書は各地の図書館に寄贈された。これが「闘病記文庫」の始まりである。最初の例は東京都立中央図書館で、2005年6月に開設された。現在では、大阪厚生年金病院患者情報室「ラヴェンダー」、鳥取県立図書館、聖路加看護大学「聖路加健康ナビスポット·るかなび」等、公立図書館、患者図書室を中心に、約10箇所に設置されている。冊数は約300 ～ 1,000冊で、設置場所の規模によって異なる。同時に図書データは、国立情報学研究所（NII）連想情報学研究開発センター長、高野明彦教授の研究室でデータベース化され、2006年6月に「闘病記ライブラリー」の名前で公開された[10]。実際の書棚のイメージに近づけるため、図書の背表紙と表紙をスキャンし、それぞれの図書データと組み合わせている。利用者は、Web上に表示された本棚のイメージから、疾患名、図書の背表紙イメージをクリックして、図書の中身をつかむことができる（図1 ～ 3）。



（図１）



（図２）



（図３）

図書データにはWebcat Plusの所蔵情報へのリンクも表示されている。各地の「闘病記文庫」及び「闘病記ライブラリー」の広報は主にマスメディアによって行われ、「闘病記」という語が広く知られるようになった。

上記にみえるとおり、「棚プロジェクト」の目的は、患者すなわち医療の受け手側に必要な情報を提供することである。しかし「闘病記」が患者と医療従事者のそれぞれに固有な情報の「隙間」を埋める情報源となり得るのであれば、患者側だけでなく医療従事者側にとっても意義をもつと考えられる。次節では、医学·看護教育において「闘病記」が果たす役割を考察する。

1.3 医学・看護教育における活用の意義

平成13（2001）年、文部科学省は『医学教育モデル・コア・カリキュラム』[11]を公表し、医学卒

前教育において「基礎医学や社会医学における臨床との有機的な連携」[12]をもつために教育内容の再編成が必要であることを主張した。このカリキュラムは試験運用期を経て平成17（2005）年度から本格的に運用されている。制度上もっとも異なる点は、4年次から5年次への進級に際して共用試験を課すことである。共用試験に含まれるOSCE（Objective Structured Clinical Examination: 客観的臨床能力試験）はいわゆる模擬診療であり、これによって、5,6年次の臨床実習以前に患者への態度や診察の技能が評価されるようになった。同時に従来から行われていた早期体験実習（early exposure）が注目され、1,2年次の早い段階で実際の医療現場等に接する機会を設けて医療者としての自覚と学習の動機を促す方法が広く採られるようになった。また、基礎医学と臨床医学、社会医学は、実際の医療における観点から横断的に再編成された。このカリキュラム実施により、卒前教育においても臨床の場が重視されるようになったといえる[13]。

コア・カリキュラムに挙げられた到達目標のひとつに「患者の心理的および社会的背景を把握し、抱える問題点を抽出・整理できる」という項目がある。これは実際の医療（臨床）の場において非常に重要な要素であると考えられる。すなわち医療者は、治療行為の対象であると同時に人格を持った一個人に接することになる。しかし、従来の医学教育の中で、卒前卒後を通じて、患者と医療者との一個人としてのかかわり方について学ぶ機会はほぼ存在しないといってよい。結果的に医療者は、患者と医療者である自身との関係性についてほとんど無自覚となり、両者の立場の違いは明確に認識されない。このような状況において、臨床の場からNBM（Narrative-Based Medicine）という概念が現れた[14]。narrativeは「物語、語り」「語る（叙述する）こと」という意味をもつ。NBMは、臨床において患者による語りそのものやその語り方を重視し、医療者と患者の間における対話を重要な医療行為の一部としてとらえるという方法論である。この方法において、患者の語りは必ずしも疾患の原因と直接結びつくものではない。しかしその病いを、患者本人や本人の生活、背景の文脈において捉えることで、患者自身にとっての問題点や治療の方針を明らかにすることができる。同時に患者の語りは立場の違いを医療者に認識させることにもなろう。それは医療者自身も「語り」を個別にもつことへの認識でもある。

「闘病記」に記される様々な固有の経験は、書き手自身の文脈でとらえられた病いの経験である。よって「闘病記」を読むことは、擬似的ではあるにせよ、患者一個人の語りに触れ、そこに語られる病いの文脈を把握することである。ここに、医学教育において「闘病記」が扱われることの意義が存在する。

看護師は医療者として医師よりも患者に近い場所に位置しており、患者の語りへの認識と傾聴は医師よりも切実であると推察される。看護教育においては「闘病記」の記述がテキストとして用いられる例が既に存在する。一方、医学教育のカリキュラムで「闘病記」を取り上げている例は現段階で見当たらない。カリキュラムは医学的知識と技能の学習のために組み立てられ、患者の語りといった、ある種抽象的な「関係性」を学ぶ余地はほとんど存在しないようにみえる。授業の中で扱うことが難しい場合、医学生はどのようにして「闘病記」に接し得るか。答えのひとつが、大学医学図書館における「闘病記文庫」設置ではないだろうか。

○ 2. 愛媛大学の事例 ○

2.1「闘病記文庫」設置の経緯

愛媛大学は3キャンパスより成り、各キャンパスに図書館を有する。中央館、医学部分館、農学部分館である。医学部分館（以下、当館）は延床面積1,203㎡、蔵書数104,258冊（平成19（2007）年3月31日現在）の規模をもち、医学部（医学科、看護学科）、医学系研究科（修士課程

として看護学専攻を含む)、医学部附属病院の構成員を主な奉仕対象としている。

当館に「闘病記文庫」が設置されたのは2006年4月である。設置に至るまでの経緯を表2に記す。

愛媛大学図書館「闘病記文庫」設置の経緯

2005.11	愛媛大学医学部生有志による「闘病記」読み込み・分類・データ作成作業
2006. 1	全国患者図書サービス連絡会講演会
2006. 3	「健康情報棚プロジェクト」より「闘病記」寄贈(279冊)・図書館医学部分館で受入作業
2006. 4	「闘病記文庫」開設

(表2)

2005年11月に行われた作業は、「棚プロジェクト」で収集され未分類の「闘病記」を学生有志で読み込み、疾患名等のデータと200字程度の抄録を作成するものであった。学生が休日に医学部の教室を借り、3日間でのべ約40人が参加して約200冊を読了・整理したという[15]。この時点では学生有志と当館の間に接点はなく、当館ではこの作業を認識していなかった。

2006年1月、筆者は偶然参加した患者図書室関係の講演会で石井氏と初めてお会いした。その際に「棚プロジェクト」の活動について伺い、愛媛大学の学生が「闘病記」の分類やデータ作成の作業に関わったことを知らされ、あわせて当館への「闘病記文庫」設置を打診されたように記憶している。「闘病記文庫」設置にあたっては「棚プロジェクト」からの図書寄贈を受けることとなり、条件として「棚プロジェクト」による疾患名分類を引き継ぎ、他の図書と別に配架すること、図書のカバーや帯は奥付等と同様に重要な情報源と見なされるため、外さずに装備することが挙げられた。打診は当館へ持ち帰られ、チームリーダーを通じて分館長、図書館事務課長に諮られ、図書館における設置目的と設置のための具体的な方法について検討された。

最終的に、「患者やその周りの方自身によるナラティブ(Narrative=語り、語り手)という側面から、これらの闘病記を医学・看護教育にも役立て」[16]るという設置目的、「棚プロジェクト」による分類を踏襲すること等が決定された。場所はカウンター前の90cm棚5段1連を確保した。3月中旬に装備済みの「闘病記」279冊が寄贈され、急ピッチの受入、目録作業が行われ、4月1日に開設の運びとなった。「闘病記文庫」設置は東京都立中央図書館、大阪厚生年金病院患者情報室「ラヴェンダー」に続いて全国で3番目、大学図書館では最初である。

2.2 活用の実態と課題

後日、学生有志の代表と交流を持つことができた。当館における「闘病記文庫」設置はその前年に行われた学生有志の活動が契機となっていたため、学生の認知度は高かったように思われる。読み物としてまとめて借りていく学生もあった。

看護学科では学科創設時から「闘病記」の記述研究を含む演習科目が存在しており、その補助資料群として活用されることとなった。特定の疾患分類の「闘病記」を読むという課題が出された授業もあった。看護学科教員からは、「闘病記」という分類で資料が図書館に配架されたことで、学生が資料を選びやすくなったというコメントをいただいた。新たな視点による再分類、配置によって、資料が利用者の目に留まるようになったと解釈している。

医学科では授業への導入は行われていない。医学科の教員の間では当初、寧ろ「闘病記文庫」は学外一般へのサービスとして認識されているようであった。しかし医学科生への貸出は常にあり、資料自体の需要は医学科でも確認されている。「闘病記」を用いたディスカッション等の積極的な活用は、現在までは行われていないようである。

当館では当初300冊足らずで発足し、2006年6月に「棚プロジェクト」より追加寄贈を受けた。2007年度末に100冊程度の購入を行い、現在では570冊程度を揃えている。潤沢とは言いがたい図書館資料費の中から「闘病記」に限定して予算を確保することは難しく、主な収集手段はこれまでのところ寄贈となっている。資料の充実とその

手段確立、予算確保は大きな課題である。

「闘病記」の整理について、当館では目録分類方法と実際の配架とを一致させる方法を採った。すなわち「棚プロジェクト」による独自の疾患名分類に沿って請求記号を付与し、従来の資料と別に配架している。具体的な疾患名は目録に入力されておらず、件名等に疾患名を採用することについては今後検討の余地がある。また、従来の所蔵資料で「闘病記文庫」の資料と同一書誌であるにもかかわらず、分類方法の違いによって配架場所の異なっている資料が数点確認されており、この配架調整についても検討する必要がある[17]。

設置後にローカルメディアで紹介され[18]、附属病院の患者・家族を含む学外一般利用者への貸出が若干増加した。「棚プロジェクト」は本来患者への情報提供に主眼を置いているため、ある程度予測はされていたが、当館においても「闘病記」資料群は学外一般へのサービスを担い得ることが明らかになった。副次的な位置づけではあるものの、附属病院との連携によって、地域貢献の一端を担うことは可能であろう。

○ 3. 結論：現状と今後の課題 ○

「闘病記」は、病いの当事者が自らの経験に基づいて記したものである。その記述は、同じ病いの経験を負う別の当事者にとっては貴重な情報源や体験共有の契機となる。この体験共有は、医療者にとっても、医療の受け手側の文脈において病いをとらえるための手がかりとなる。

「闘病記」資料群は全く新たに出現したわけではなく、新たな視点に基づく分類の設定によって切り出されたものである。現在までに出版された「闘病記」の数は膨大であり、既に絶版となって図書館でしか利用できない資料も存在する。よって「闘病記」へのアクセスを容易にするために最も効率的な方法のひとつが、図書館における「闘病記文庫」設置となる。現段階で、「闘病記」を資料群として確立するときに最も大きな課題となるのは、資料の選定と分類方法である。「棚プロジェクト」内部には資料の選定基準が明確に存在しているようであるが、筆者の知る限りでは公開されていない。分類についても、ICD分類（International Statistical Classification of Diseases and related health problems, 国際疾病分類）とも異なる独自の体系と項目名を持っている[19]。この独自性を解決するために、「棚プロジェクト」は「闘病記文庫」設置普及のガイドラインを作成した[20]。

ガイドラインには「闘病記文庫」設置の意義や実際の設置方法（資料入手方法、装備、運用等）とあわせて、分類に採用した疾患名と「闘病記」のリストが掲載されている。疾患名は334件、掲載資料は2,105冊である。図書館は所蔵資料からこのリスト掲載資料を抜き出し、アクセスポイントとして疾患名を付与することで、「闘病記文庫」を設置することができる。ただしこのガイドラインは、例えば分類とする疾患名について「病名が増えた場合」、「各館の判断で増やして」構わないと述べているように、あくまで参考程度に大まかなポリシーのみを提示し、「闘病記」についての厳密な定義や疾患分類は各館個別の方針に任せている。「闘病記文庫」設置の際には、その具体的な方針について十分な検討が必要となろう。

大学医学図書館の蔵書は基本的に医学資料によって構築されており、「闘病記」のような「読み物」はあまりみられない。「闘病記」の収集と提供は、新たなサービスの展開とも位置付けられる。したがって、必要の是非を含め、提供する目的と方針を図書館の中で明確にする必要がある。カリキュラムや授業の補助資料として扱われる場合は、方針の設定を比較的スムーズに行うことができる。教育担当の教員と連携協力をはかることによってニーズはある程度把握され、積極的な活用についてのアピールも可能となろう。「闘病記文庫」設置の際には、おそらく若干まとまった数量の資料を一箇所に集めて配架することが視覚的な効果を生み、広報を容易にする。設置の際の課題は、（1）資料と場所の確保、（2）広報、（3）予算確保を含

めた、継続的なサービスのための資料収集、である。

○ おわりに ○

本稿では、「闘病記」資料群の性格と、普及にかかわる団体およびその活動について述べ、医学・看護学教育における活用の意義を考察した。その後に、大学図書館として初めて「闘病記文庫」設置した愛媛大学の事例を簡単に報告し、サービスを行う上での現状と課題をまとめた。愛媛大学の「闘病記文庫」設置は、教員の指示によるものではなく、図書館からの提案ともいうべき実践であった。筆者個人としては、当初、大学図書館で「闘病記文庫」を設けることの意義をあまり把握しておらず、「気軽な読み物としての提供」でも構わないと考えていた。活用の方法は利用者次第ではあるが、実際にサービスを始めてみると、医学科、看護学科を問わず、常に一定の利用がある。

医学は日夜進歩しており、卒前教育で学ぶべき医学知識や技能は増加する一方である。患者の語りや「闘病記」は、このような科学的知識や技能の中に完全に含められるものではなく、学習効果の量的な評価や定式化の範疇では十全に活用することができないため、カリキュラムに取り入れることは難しいと思われる。しかし実際には医学教育にNBMの方法を模索する試みは始まっており[21]、医学準備教育の位置づけで、医学生が「闘病記」を読んでディスカッションを行った事例も現れた[22]。「闘病記」を資料群として整備し、図書館内に配置する上で、具体的な課題は多い。しかしながら、「闘病記」が一般に入手し難い側面を持ちつつ、既に看護教育では扱われており、医学教育においても取り入れられようとしている以上、その資料群へのアクセスを容易にすることも大学医学図書館の果たすべき役割のひとつになるのではないだろうか[23]。

本稿は、大学図書館問題研究会京都支部による連続セミナー「知の変容と大学図書館」第4回、ライブラリアン・セッション（2007年10月7日）における発表内容に、加筆修正を行ったものである。発表当時の著者の所属は愛媛大学図書館であった。

注

1 「病い」という語は、疾患や症状にあらわれる「病気」だけでなく「疾患等（disease）を抱えている状態」を包括して指す表現として用いられている。本稿ではこの表現に倣う。

2 後述する「闘病記文庫」設置以外にも、例えば国立国会図書館では、所蔵資料の中から「闘病記」を疾患名で探すことができるよう、2007年6月以降に整理されたものについては件名に「闘病・看病」及び疾患名を付与している。
国立国会図書館テーマ別調べ方案内「闘病記・看病記を探す」<http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/theme_honbun_400087.html>（accessed 2008-05-17）

3 この項について、論の多くを看護学研究者の門林道子氏に拠る。「闘病記」という語の定義も氏の定義に拠った（注4）。門林氏は死生学の観点から、「闘病記」の記述をもとに、患者やその家族の「語り」およびその動機、「語り」をきっかけに形成される対話等について研究を行っている。研究にあたって「闘病記」の定義を明確にする必要があったと考えられ、氏の定義に対して他の研究者等からの批判的検討は確認されていない。このこと自体が、研究対象としての「闘病記」の歴史の浅さを示すとも考えられる。なお門林氏は後述する「健康情報棚プロジェクト」のメンバーである。門林道子「病いの語り：グリーフワークとしての闘病記」『日本女子大学人間社会研究科紀要』8, 123-137（3, 2002），門林道子「現代における「闘病記」の意義：がん闘病記を中心に」『看護教育』45（5), 358-364（5, 2004）他

4 『臨床死生学事典』日本評論社 2000, p.14-15 による。

5 北澤京子、石井保志「患者・家族への情報提供を模索する：多職種協働による健康・医療情報の社会提言」『情報の科学と技術』56（9), 406-411（9, 2006）

6 東京大学医療政策人材養成講座ホームページ<http://www.hsp.u-tokyo.ac.jp/index.html>（accessed 2008-05-08）

7 石井保志「健康情報棚プロジェクトとは何か」健康情報棚プロジェクト編『からだと病気の情報をさが

す・届ける』読書工房 2005, p.7-17

8　健康情報棚プロジェクト『闘病記文庫棚作成ガイドライン』第1版 2006　和田恵美子（主任研究者）「中範囲理論を用いた看護におけるナラティブの実践基準開発（平成16年度科学研究費補助金若手研究(B)）」により作成された。

9　和田恵美子「「闘病記文庫」は患者・医療者に何をもたらすか：健康情報棚プロジェクトの多職種協働活動を通して」『情報管理』49（9), 499-508（12, 2006）他、「棚プロジェクト」メンバーによる事例報告を参考にまとめた。

10　「闘病記ライブラリー」<http://toubyoki.info/>（accessed 2008-05-24）収録図書件数は700件となっている。

11　医学部在籍中に身に着けるべき態度や技能について設定され、その達成のために必要なコア・カリキュラムが示されている。コア以外の部分は各大学独自のカリキュラムやプログラムで補うことが求められる。同様のコア・カリキュラムは歯学、薬学でも策定され、他分野でも学部教育の指針として導入が検討されている。
医学における教育プログラム研究・開発事業委員会『医学教育モデル・コア・カリキュラム－教育内容ガイドライン－』（21世紀における医学・歯学教育の改善方法について－学部教育再構築のために－【別冊】）<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/03/1igaku.pdf>（accessed 2008-05-29）

12　「医学教育改革の切り札となるか？　モデル・コア・カリキュラム（試案）が発表される－臨床実習前に全国共用進級試験も実施」『週刊医学界新聞 医学生・研修医版』2415（2000年12月4日）<http://www.igaku-shoin.co.jp/nwsppr/n2000dir/n2415dir/n2415_06.htm>（accessed 2008-05-29）なお「卒前教育」とは医学教育において学部6年間に行われる教育を指す。卒前に対し、主に医師国家試験合格後の研修医に行われる教育を指して「卒後教育」という。

13　なおこのカリキュラムは平成19（2007）年に一部改訂され、冒頭に「医師として求められる基本的な資質」という7か条が新設された。「①人の命と健康を守る医師の職責への十分な自覚のもとに、医師の義務や医療倫理を遵守し、絶えず患者本位の立場に立つ」ことを筆頭に、豊かな人間性、医師としての業務を遂行するための実践的能力、医療チームの一員としての行動、生涯に亘る学習態度等が求められている。
『医学教育モデル・コア・カリキュラム』平成19年度改訂版（文部科学省モデル・コア・カリキュラムの改訂に関する連絡調整委員会のホームページ）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/033/>（accessed 2008-05-31）

14　斎藤清二「ナラティブ・ベイスト・メディスン（NBM）」『日本医事新報』4246, 22-27（9, 2005）, 宮田靖志、山本和利「ナラティブ・ベイスト・メディスンとは何か」『治療』増刊　4, 629-633（2002), Greenhalgh T., Hurwitz B. "Why study narrative?" British Medical Journal 318, 48-50（1, 1999）

15　石井氏談話、学生談話、小金丸茂博「闘病記文庫のすすめ」『愛媛大学図書館報「図書館だより」』81, 7（10, 2006）等による。作業日には「棚プロジェクト」のメンバーも参加し、具体的な作業の指示がなされた。

16　愛媛大学図書館「医学部分館からのお知らせ」『愛媛大学図書館報「図書館だより」』80,13（4, 2006）

17　蔵書検索（OPAC）からは疾患名による検索ができないため、別途、その他の所蔵資料という形でホームページ上に疾患名別の図書リストを作成している。分類方法については様々な試みがなされているようである。「棚プロジェクト」から寄贈を受けた鳥取県立図書館では件名に「闘病記」及び疾患名を付与し、図書本体に疾患名分類とNDC分類の2種類のラベルを貼付した上で、疾患名によって配架していた。
[愛媛大学図書館]医学部分館所蔵資料闘病記文庫疾患別リスト<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/IGAKU/contents/medshiryo.html#tobyoki>（accessed 2008-05-17), 鳥取県立図書館「闘病記の探し方」<http://www.library.pref.tottori.jp/medical/medical3.html>（accessed 2008-05-17）

18　「心の杖を求めて 1 闘病記を贈る」愛媛新聞2006年6月16日付記事、「医学生が作った闘病記文庫」NHK松山放送局2006年7月19,20日放送

19　「棚プロジェクト」メンバーの和田によると、選書については「民間療法や宣伝広告に偏りすぎるもの」は除いている。また疾患名については、「医学上の精緻な分類」に拘らず、「あえて著者の記述にある疾患名をそのまま」用いている。この方針によって、複数の疾患名並列という分類も存在する。和田恵美子「「闘病記文庫」は患者・医療者に何を

もたらすか：健康情報棚プロジェクトの多職種協働活動を通して」『情報管理』前掲書

20 健康情報棚プロジェクト『闘病記文庫　棚作成ガイドライン』前掲書

21 鶴岡浩樹、鶴岡優子他「小グループによるnarrative-based medicine（NBM）教育の試み」『医学教育』38（4），259-265（8，2007）。この事例報告では、具体的な診療のシナリオとその内容に沿った問いが予め設定されており、学生（4、5回生）はその設定に基づいてディスカッションを行っている。闘病記そのものの導入は行われていない。

22 京都大学医学教育推進センターでは今年度、医学科新入生1泊セミナー（2008/4/19-20，京都府立ゼミナールハウス）のワークショップに、「闘病記」によるディスカッションを導入した。新入生は予め各自で選んだ「闘病記」を読み、感想文を提出した上でセミナーに参加する。ディスカッションでは8人程度の班に分かれ、各班にファシリテーターの上回生が1名配置される。班別のディスカッションには2時間が充てられ、その後各班の代表者が討議の様子や内容について全員の前で簡単に（3分程度）発表する。筆者は幸いにもこのワークショップを見学する機会を与えられた。班によって、2時間という討議時間は長くも短くも感じられたようである。最も印象的であったのは、「闘病記を題材にしてどれほど議論できるものか不安だったが、いざ始めてみると、多くの意見が出され、思っていたよりも充実したディスカッションを行うことができた」という感想を、新入生、上回生ともに持ち得たことである。なお新入生が「闘病記」を選ぶ際の参考に「闘病記ライブラリー」のホームページが示された。

23 医学部の学生が患者の語りを学ぶための資料群をもつ大学図書館は、当館以外にも複数存在している。筆者の知るところでは、群馬大学総合情報メディアセンター図書館医学分館、福井大学、奈良県立医科大学附属図書館である。奈良県立医科大学では医学生による働きかけを受けて、図書館が「闘病記文庫」を設置した（詳細経緯は未確認）。2008年3月10日開設。
群馬大学総合情報メディアセンター図書館医学分館：ライブラリー「患者さんのこころ」<http://www.lib.gunma-u.ac.jp/mlib/kokoro/index.html>（accessed 2008-05-06），奈良県立医科大学附属図書館ホームページ 2008.3.7付お知らせ<http://www.naramed-u.ac.jp/~lib/index.htm>（accessed 2008-05-06），同館公式ブログ「ないとブログ」<http://naramedulib.seesaa.net/>（accessed 2008-05-06）1月30日付記事ほか

参考資料

大熊由紀子、開原成允、服部洋一編著『患者の声を医療に生かす』医学書院 2006

トリシャ・グリーンハル、ブライアン・ハーウイッツ編集；斎藤清二[他]監訳『ナラティブ・ベイスト・メディスン：臨床における物語りと対話』金剛出版 2001

江口重幸、斎藤清二、野村直樹編『ナラティヴと医療』金剛出版 2006